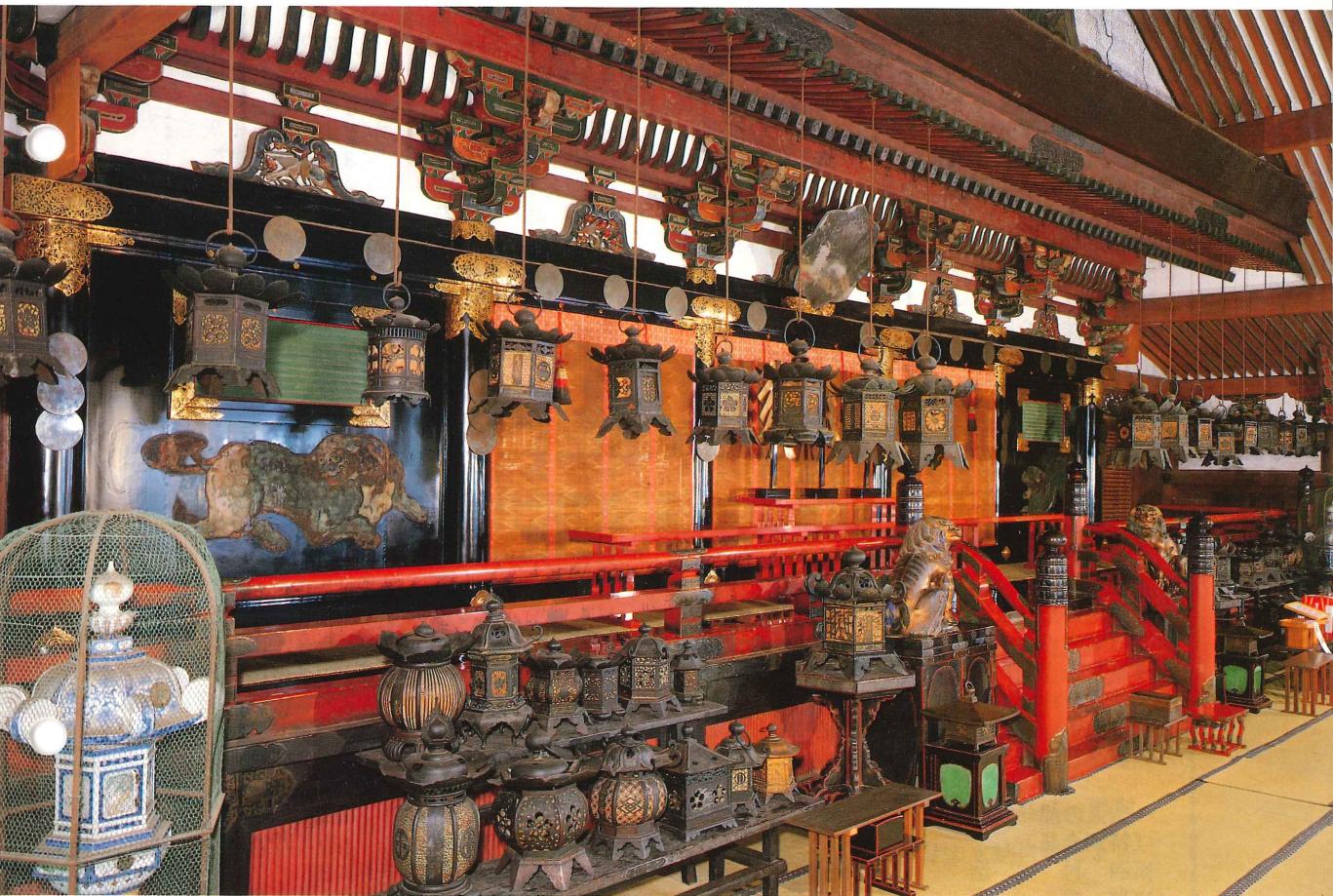




京都市文化觀光資源保護財團

会報

No. 43



もくじ

京のよさをまもって (6) 「京のわらべうたとともに」

あいりす音楽院院長 高橋美智子 P 4

山路 興造 P 6

「京都の芸能史」

目で見る京の文化財 No.13 「京の社殿」 P 8

古い寺に住んで <20> 憧持寺副住職 中村 真澄 P 10

京のみちを歩く <3> 「木屋町通界隈」 P 11

京の伝統行事芸能 ⑥ 「北白川高盛御供」 P 12

保護財団の活動 P 15

会報題字
理事長 佐伯 勇
表紙
北野天満宮本殿石の間

会報	60. 10 . 1
No. 43	
編集・発行	
財団	京都市文化觀光資源保護財團
法人	京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内
〒606	電話 075-752-0235 (代)

**募金にご協力いただき
ありがとうございました**

寄付者芳名録（敬称略）60.4.1～60.8.31

－法人及び団体の部－

〔特別会員〕

※京都中央信用金庫 <3,800万円>
※京都信用金庫 <1,501万円>
※立石電機株式会社 <900万円>
※東洋信託銀行株式会社 <900万円>
※日本新薬株式会社 <900万円>
※阪神電気鉄道株式会社 <700万円>
※株式会社 ワコール <700万円>
※山一證券株式会社 <260万円>
※近畿急便株式会社 <230万円>
※京都旅館不動産株式会社 <150万円>

〔普通会員〕

※厚木市立睦合中学校 <44万8千8百9円>
※株式会社 灰孝本店 <31万円>
※京阪コンクリート工業株式会社 <27万円>
※織悦株式会社 <22万円>

※厚木市立厚木中学校三学年修学旅行生一同
<18万1千3百5拾5円>

※丸三株式会社 <18万円>
※有限会社 錦 <16万円>
※旅館 松葉亭 <14万円>
※株式会社 曽根商店 <13万円>
※株式会社 川中 <10万5千円>

〔賛助員〕
※ヤマカワ株式会社 <6万8千円>
※株式会社 土井志ば瀆本舗 <6万円>
※厚木市立小鮎中学校生徒一同 <5万円>
※厚木市立玉川中学校 <4万百5拾8円>
※株式会社 丸美屋 <4万円>
厚木市立荻野中学校生徒職員一同 <2万円>

※観光客の行かない社寺をめぐる会
<1万5千円>

－個人の部－

〔特別会員〕

※西村平治 <105万円>
※狩郷修 <55万1千円>
※高橋政幸 <33万円>
※親谷貞己 <31万円>
※山本龍太 <31万円>
※山本多満 <21万円>
※丸山未樟 <17万円>
※高島国男 <16万円>
※石田豊之助 <15万円>

※今井雅治 <15万円>
※井上嘉久 <15万円>
※大槻敏夫 <15万円>
※岡本保止 <12万2千円>
※伊藤ナツエ <12万1千円>
※竹内キミ子 <12万円>
※奈良行博 <12万円>
※山崎章 <12万円>
※高橋一男 <11万円>
※今井栄一 <10万円>
※弘津友三郎 <10万円>
竹村卓 <10万円>
竹村陽子 <10万円>
※中島次郎 <10万円>

〔普通会員〕

※原山喜代 <9万円>
※嶋津峯真 <8万6千円>
※三原慶三郎 <8万1千円>
※村田陶苑 <7万5千円>
※神崎順一 <7万2千円>
※上田長雄 <7万円>
※上野山志津子 <7万円>
※植松皆昌 <7万円>
※加藤雅一 <7万円>
※柴田二郎 <7万円>
※児玉誠 <6万7千8百円>
※友田弘治 <6万6千円>
※大嶋真治 <5万4千円>
※加来大忍 <5万円>
※那田可月 <5万円>
※皆川月華 <5万円>
※山田省曹 <4万5千円>
※新庄英雄 <4万3千円>
※辨官弘晃 <4万3千円>
※田村芳子 <4万2千円>
※松島浩子 <4万2千円>
※寺島常蔵 <4万円>
※今井憲一 <3万7千円>
※井田喜智郎 <3万6千円>
※安田孝夫 <3万6千円>
※三宅康雄 <3万3千円>
※井上文太郎 <3万円>
林喜美子 <3万円>
※駒井桂之助 <2万9千円>
※上田真一 <2万8千円>
※遠藤伊之助 <2万8千円>
※大野健三 <2万8千円>
※松嶋芳子 <2万7千円>
※青木文子 <2万6千円>
※西原寿子 <2万6千円>

※田井四郎 <2万5千円>
※平野昭子 <2万5千円>
※岩井貞三 <2万1千円>
※平野和彦 <2万5百円>
※盛田准子 <2万円>
※山田順三 <2万円>

〔賛助員〕

※金井利夫 <1万8千円>
※野村鉄治 <1万5千円>
※水谷勢津子 <1万5千円>
※梶村ふみ子 <1万3千円>
※佐村伸一 <1万3千円>
※眞渕紳一 <1万3千円>
※北村登喜子 <1万2千2百円>
※田尻正雄 <1万2千円>
※手塚栄子 <1万2千円>
※西田実造 <1万2千円>
※橋本貞造 <1万2千円>
※渡辺きくよ <1万1千円>
※竹内とよ弘 <1万2百円>
※金丸野田平三郎 <1万円>
※米谷栄二 <1万円>
※杉田実 <8千円>
※松田良雄 <7千円>

※山川和彦 <7千円>
※青木紀雄 <6千円>
※桐生礼次郎 <6千円>
※余田善三郎 <6千円>
※渡辺澤樂勲 <6千円>
※福嶋龍馬 <5千円>
※市川明子 <5千円>
※北口貴美雄 <5千円>
※北村朋子 <5千円>
※藤塚吉太郎 <4千円>
※植野美智子 <3千円>
※北本三重三郎 <3千円>
※佐藤昭夫 <3千円>
※西田新五郎 <3千円>
※村尾京勝 <2千円>
※大杉勝美子 <1千円>
※折竹喬子 <1千円>
※平野泰子 <1千円>

(※印は、追加寄付の篤志者、寄付金額は累計額。なお、昭和60年8月31日以降の寄付者の方につきましては紙面の都合により今後順次紹介させていただきますのでご了承下さい。)

京都の文化財をまもる

5億円募金にご協力を

一京のよさをまもるこの運動への参加を

あなたのまわりの方々にも呼びかけて下さい—

当財団では、現在5億円募金運動を全国的に
にすすめています。

京の四大行事をはじめとする京都の文化財
をまもる5億円募金を達成するために皆様も
金額の多少にかかわらずご協力をお願ひいた
します。

○基金にご協力いただきます場合は、同封
させていただいております納付書により
ご送金下さい。

募金その他についてのお問い合わせは、
当財団事務局まで

(075)752-0235(代)



京のよさをまもって（6） 京のわらべうた とともに

高橋美智子

夕飯にもどることも忘れ、声をはり上げてうたった遊びの歌の数々——、私の楽しかった子ども時代は、わらべ歌の中に生きているような気がします。

京に残るわらべ歌を集め、採譜することをはじめて、もう30年近くなるでしょうか。それは、失われてゆくふるさと京の情緒を、何かに記録しておきたい、京の子ども達に残しておきたい、そんな気持ちからでした。いつのまにかライフケースになってしまった、私のわらべ歌研究のはじめです。

海には海の、山には山の歌があるように、京ことばでうたいがれてきた京のわらべ歌は、京の歌です。そこには、京都人の生活の歴史が、そのまま、うたい語られています。

京のわらべ歌は、全国各地のわらべ歌に比べて、歌詞もふしも洗練されています。やはり、雅やかな香り高い都の文化の中に、生れ育ったからといえましょう。京の文化の厚みが感じられます。

ひい ふう みい よ
四方の景色を春とながめ
て……

「祇園の二軒茶屋」や「歌



京のわらべ歌の収集、研究をされておよそ30年。わらべ歌をとおして子供たちの心を育てたいと願われている。（写真：わらべ歌を取材中の筆者）

の中山」がでてくるこの手まり歌は、「はんなり」という京ことばが、そのままあてはまる歌で、全国の手まり歌の中での秀歌といわれています。また、

雪やこんこ あられやこんこ お寺の柿の木に いっぱいいつもれ こんこ

この歌の美しさは格別です。平安時代に始まり、江戸時代前期に、「雪やこんこ あられやこんこ お寺の柿の木に ふりやつもれこんこ」（『一休咄』）とうたわれてから、今日までほとんど変化なしに伝承されていることなど、京ながらではの一例です。

現在も生活の中に生きている、「丸竹夷二押御池」。東西と南北の通りが、碁盤の目のように整然と区割りされている京の街に、これからも、うたいがれていくことでしょう。みなさんから、しばしば尋ねられることですが、「丸竹夷」の対の歌ともいえるものに、南北の通りをうたったものが、かつてはありました。消滅してしまったのは、語呂の調子がうたいにくか

ったのでしょうか。「なんやゴツゴツしてた」。母がうたっていたのを聞いたことがある、という方の評です。幸い歌詞が残っておりますので補作して、「丸竹夷」のように、うたいやすい歌に複元しようと思っております。

ともあれ、今日まで長い年月をかけて、京にたくさんわらべ歌が損なわれずに伝承されてきたのは、千年の都だからといふこともさりながら、「うちの子どものころはこうやった。こんな歌をうとうて遊んでた」と、誇らかに伝えてきた、京都人のエネルギーがあったからです。

最近わらべ歌は、幼児教育、音楽教育、民俗学など、いろんな方面から見直され、特に京のわらべ歌は、全国のわらべ歌の原点といわれています。しかし、世の移り変りと共に、古くから伝承されてきた文化遺産はどんどん消えて行きます。子ども達が口から口へ伝えて来たこの無形の文化は、一度消えてしまったなら、再び生き返ることはできません。

去る8月25日、今年も「京都こども合唱祭」が、京都会館第一ホールで開かれました。たまたま会場の京都会館が開館25周年に当るため、その記念行事の一環として、参加児童1300人がフィナーレで、京都の風景がスライドで映し出されるなか、「京都のわらべ歌」を合唱しました。



あいりす児童合唱団 により唄われる京のわらべ歌。
(当財団主催「郷土芸能の夕」より)

た。舞台正面に「大文字」がくっきり映し出されると、「いんでこ大文字 大文字がとぼった……」と、うたっていた子ども達の間から、ホッパーと声にならない感動の声が会場に流れました。その時私は、京都の子ども達が肌で京都を感じている、と思いました。いつしか観客席の父兄達の声も加わって、会場全員の大合唱となり、美しい余韻を残して幕はおりました。

わらべ歌を残しておいてよかった。私はそつとつぶやいていました。

（あいりす音楽院院長）

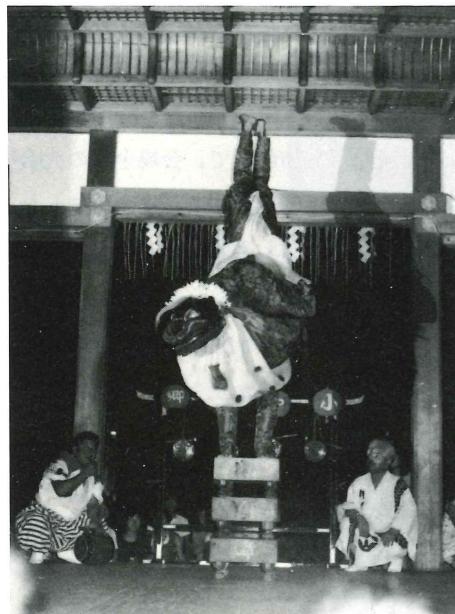


京都の芸能史

山路 興造

いつの時代でも、京都がわが国における文化的中心的役割をない続けていたことは変りがない。

それは芸能史においても同様で、今日全国に残るさまざまな民俗芸能が、なんらの形でその発生を京都としている。たとえば島根県鹿足郡津和野町の鷺舞が、京都祇園会のそれを伝えたことは、現在逆輸入されているからよく知られているが、香川県多度郡仲南町佐文で、雨乞の折に踊られて来た綾子踊などは、京都から落ちのびた公卿の娘（遊女ともいう）が伝えたとしている。



六斎念佛

さいれいばやし
全国の祭礼囃子なども、伝承の古いものはすべて祇園囃子との関係を伝えており、京に対する文化的なこがれが、どれ程に彼らの精神的生活を豊かなるものにしていたか計り知れない。

現在に伝承された全国の民俗芸能ルーツを研究するわれわれにとっては、それならとその原型を京都の祭礼や芸能に勇んで求めることとなるわけだが、その期待はしばしば裏切られる。

確かに夏空に響き渡る祇園囃子や、桜の花の散る中で乱舞するやさしい花、秋の闇にほの揺れる灯籠の明りが印象的な八瀬の赦免地踊など、京に残る民俗芸能の種類は決して少なくはない。しかし、地方の民俗芸能の由来伝承が、京都を源流とする数からくらべると、その数はわずかである。今日京を代表する民俗芸能の一つである六斎念佛などは、近江・丹波・山城の近国や、大阪・奈良・福井などに念佛六斎の分布がみられるが、太鼓を使う芸能六斎となると、その伝播は限られる。壬生狂言などの大念佛狂言となると、若狭の小村一ヶ所を例外として、京都の地以外の伝承はない。

現在の京都には諸国の人々がわが芸能の故郷とする程には民俗芸能の伝承はないのである。

しかし文献を紐解けば事情は一変する。各時代を通じて、さまざまな芸能が京都の地に花開いているのである。特に江戸時代前期までに、地方に伝播した芸能のすべてが京都の地で育てられたものと考えて大過ない。

たとえば田楽である。平安時代中期以降、鎌倉時代末期頃まで京都の祭礼には欠かすことの出来なかった田楽法師による田楽躍は、現在京都では見ることが出来ない。この芸能は片鱗まで加えれば全国にまだ六十余ヶ所伝承されてお

り、岩手県平泉町毛越寺の延年や、和歌山県那智勝浦町那智大社の扇祭、島根県隠岐島の祭礼などでは、往時の面影をしっかりと伝えている。京都府下でも丹波京北町周山矢代中の日吉神社、丹後弥栄町野中大宮神社や、福知山市上野条御勝八幡社などにいつの頃から伝えられて現在に至っている。

しかし京都市内には既にない。祇園会をはじめ、市内の大社寺の祭礼には欠かせなかった田楽躍という中世芸能も、時代の流れには抗することが出来ず、その片鱗すら伝えていない。わずかに賀茂上社にこの芸能に使用したビンザサラや太鼓が残されるのみである。

近年、祇園祭の賑わいに現代振付けによる祇園田楽が演じられているが、津和野から移したものとする鷺舞ともども、往時の面影に似るのは外観のみである。

別の見方をすれば、それだけ京都の町が時代を敏感に受けとめて活気に満ち満ちて現代に至ったということにもなる。

祭礼の趣向や芸能は、時代とともに変わるのが本来的性格である。信仰と結びついて古いものが残る場合も多いが、真にそれを支える人々



祇園祭 鶩舞



が、時代の息吹きを吸っているなら、古い趣向は新しい波に飲み込まれるのが常である。

平安時代にその源のあるやすい祭とて、その歌謡は確かに当時のものを文献で残しているが、現在の芸能は、花傘を別にして平安時代まで遡るわけにはいかない。せいぜい室町時代に流行した風流の囃子物の芸態を今日に伝えると考えるのが穩当で、祇園祭に出る傘鉾（綾傘鉾）と同一の基盤を持つ芸能といえよう。

しかし文献的には紫野の地に平安時代にやすい祭があり、風流の花傘を中心とした芸能が演じられた事は事実で、その伝統が室町時代の風流の流行の波を潜って、芸態を変化させて現代に伝えられたと考えるのが現実に近いようである。

ともあれ京都の千二百年にわたる歴史が生み育てた多くの芸能が、全国の庶民の生活をどれ程に豊かなものにしたかは計り知れない。全国に残る民俗芸能のなかに、すでに京都では失なわれた芸能の実態がひそかに息づいている。それらを丹念に紡ぎ合せて、京都の、しいては日本の芸能の歴史を浮きあがらせようとするのが、当面の私の仕事と考えている。

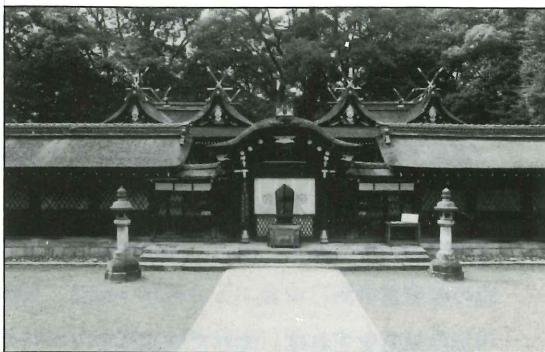
（芸能史研究家）

京の社殿

京都には、平安京以来の長い歴史と伝統を誇る古い神社が数多くあります。これら神社には、伝統的な建築様式の社殿が、緑の樹木におおわれ美しい景観をつくりています。今回の目で見る京の文化財は、神社建築をテーマにその代表的な社殿を紹介します。



賀茂別雷神社（上賀茂神社）本殿 国宝 京都市北区。
本殿及び権殿の二殿が東西にならびともに文久3年(1863)の再建である。三間社流造、檜皮葺の建物で、平安時代初期の流造神殿の典型といわれている。また、権殿は本殿が非常の場合、儀式をとりおこなう仮殿となっている。



平野神社 本殿 重文 京都市北区。
寛永年間(1624~1644)の造営で、平野造または比翼春日造とよばれ、一間社春日造の四殿を二殿づつ連結し、左右両殿の間に横棟を渡して「合の間」をつくり、正面に向拝をつけ一見して三間社のようにみえる独特の形式になっている。



北野天満宮 本殿 国宝 京都市上京区。
豊臣秀頼が慶長12年(1607)に造営したもので、権現造の最も古い遺構であり、拝殿と本殿が石の間で連絡し、これに樂の間や脇殿が付設、多数の屋根が結合したもので俗に八棟造とよぶ。この様式は、秀吉をまつった豊國廟にもちいられ日光東照宮もこれにならったものである。(表紙写真掲載)



吉田神社斎場所大元宮 重文 京都市左京区。
天神地祇八百万神をまつる大元宮を中心に、周囲に伊勢二宮をはじめ全国の延喜式内社3,132座が奉祀されている。大元宮は、慶長6年(1601)の再建で平面八角に六角の後方を付し、屋根は入母屋造、茅葺、棟には千木をあげ、中央に露盤宝珠を置くなど特殊な構造になっている。



賀茂御祖神社（下鴨神社）本殿 国宝 京都市左京区。
本殿は、東西二棟からなる三間社流造、檜皮葺の建物で、文久3年(1863)の再建で上賀茂神社本殿と同じ、流造神殿の典型といわれている。



八坂神社 本殿 重文 京都市東山区。
本殿は、平安神代初期 藤原基経がこの地に觀慶寺感神院を建て、これを設けたのがはじまりといわれる。現本殿は、承応3年(1654)の再建で平安時代末期の様式を伝えており、祇園造として知られる。



伏見稻荷大社 本殿 重文 京都市伏見区。
本殿は、応仁の乱で焼失し、のち明応3年(1494)に再建されたもので、五間社流造、檜皮葺の建物で臺股には優れた彫刻がほどこされている。



松尾大社 本殿 重文 京都市西京区。
本殿は、天文11年(1542)の再建で、屋根は檜皮葺の正面が三間、側面が四間の特殊な両流造で、世に松尾造と称せられている。また、臺股などに優れた彫刻がほどこされている。



下御靈神社 本殿 京都市指定 京都市中京区。
本殿は、寛政3年(1791)に仮居の内侍所仮殿を移したもの。入母屋造、檜皮葺の建物は、仮殿造立当初の規模、形式をよく残している。



若宮八幡宮社 本殿 京都市指定 京都市東山区。
本殿は、承応3年(1654)の造営と伝えられている。現在は、銅板葺であるがもとは檜皮葺の建物で、三間社流造に庇を取り込んで前室とし、更にその前に向拝を付けている。このような前室付きの流造本殿は、京都ではあまり見られない珍しい形式である。



古い寺に住んで 〈20〉

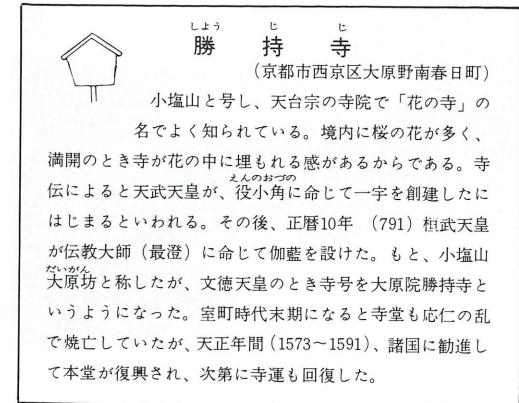
中村 真澄

今は、信仰心ばかりでなく心の安らぎを求めて寺を訪れる人々がふえたようである。当寺のように街の中心部から離れたところでも昔にくらべれば多くなっている。この人々の期待に添うためには、傷みつゝある諸堂伽藍の修理、境内及び道路の整備と清掃がこれまで以上に必要となってきます。ことに台風や大雨の時は、瓦が落ちないだろうか、雨漏りがしないだろうかとびくびくさせられています。

又、境内は桜ともみぢの木が主ですから落葉の季節は清掃が大仕事です。こられる方に少しでも良い風情を楽しんでもらえるよう、竹ぼうきを握ぎり汗を流しています。薄汚れた作業衣を着て庭掃きをしている小生に「ご苦労さんですね!」「大変ですね!」と声をかけられると、いっそう「がんばらなくては」と思いますが、中には竹ぼうきの先の方向にゴミを捨てる人も



花の寺として親しまれている勝持寺。春になると境内一円が桜の花で埋もれる。



勝持寺境内

あれば、「こんな庭でお金をとるなんて」とぼやく人もある。一つの景色でも、その心によつてそれぞれに映るのであろうが、美しいものはすべての人に美しく映ってほしいものである。その心が幸と不幸とに別れてしまうように思えてならない。

当寺の春の訪ずれは、樹令500年とおぼしき白木蓮のつぼみがふくらむ頃からはじまります。大きなつぼみが今にも開きそうになると、古木の紅梅にうすらと色がさしはじめる。この紅梅は一輪一輪の花が大きくて美しく、不思議なことに根元の幹にも花が咲き、毎年シャッターを切りに来られるファンの方が多くなり、電話での問合せが

大変なほど人気があります。紅梅が咲きそろった頃に吉野桜がチラホラと開花しはじめ、次に一週間ほどしてから西行桜をはじめ紅しだれが咲きだします。その年によってことなりますが、満開となって五、六日たつと散りはじめます。

落花さかんな時は庭園いっぱいに花吹雪となつて、とてもこの世のおもむきとは思えないほど美しく、さみしく、無情を感じさせます。

桜の花も散りはてゝ若葉の匂いでいっぱいの

京のみちを歩く 〈3〉

《木屋町通界隈》

その昔、鴨川の川原は現在の河原町通あたりまであったらしい。それを石垣を積んで護岸し埋め立てた所が先斗町周辺という。西石垣通（短縮して「西石」が今の呼び名として残る。）がその間の事情をよく物語っている。

木屋町通は、二条通から五条通まで高瀬川沿いを走っている。高瀬川は、もともと角倉了以が方広寺大仏再建の資材を運搬するために造ったものを慶長16年（1611）二条通まで延長したものである。長さ11メートル余、幅広いところで2メートル余の高瀬舟が薪炭、材木等の運搬のため上下し大変賑った。また一方、維新前は勤皇の志士と佐幕派の勇士が暗躍するところとなり、明治維新の裏舞台でもあった。木屋町界隈の石碑を丹念にめぐり歩けば日本の夜明けがなまなましく蘇ってくるだろう。

- ①桂小五郎寓居地跡
- ②長州藩邸跡
- ③加賀藩邸跡
- ④武市瑞山寓居地跡
- ⑤吉村寅太郎寓居地跡
- ⑥佐久間象山暗殺之地
- ⑦池田屋旅館騒動之地
- ⑧坂本竜馬寓居地跡
- ⑨本間精一郎遭難之地
- ⑩土佐藩邸跡
- ⑪彦根藩邸跡
- ⑫坂本竜馬・中岡慎太郎遭難之地

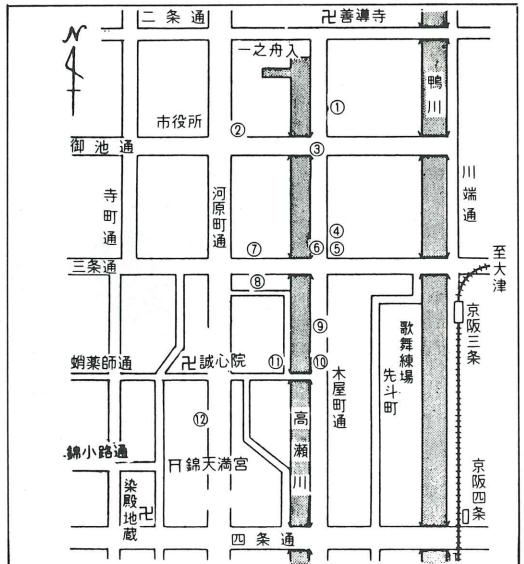
新緑の中に、数本の里桜（ぼたん桜）が開花し、青葉の中に浮んでいるように見えてまことによろしき風情であります。

このようにして、梅雨の季節へと移っていきます。

（勝持寺副住職）



高瀬川一之船入



—「京のみちを歩く」京都市文化観光局観光課発行より—

北白川高盛御供

京都の洛北 北白川は、白川女で知られる花の名所である。北白川では、毎年10月7日早朝、古くからこの地に伝わる氏神の北白川天神宮へ高く盛りつけた立体的な神饌を奉納するめずらしい行事高盛御供がおこなわれる。

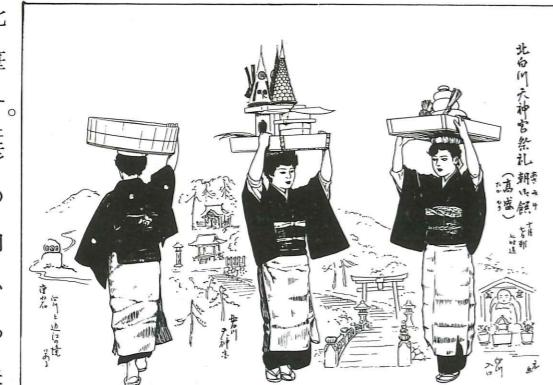


北白川の高盛 御供について

松田 元

北白川も現在では特に他の地域と違った風俗を見ることはあります。秋の祭礼における高盛の行事だけは他に比類がないのでここに特筆しておきたいと思います。北白川天神宮（祭神少彦名神）に高盛の朝御饌のあることは本誌16号に内田福太郎氏が書かれていましたが、形や製法がわかつて頂ければ一層興味が深かろうと考え、一筆いたしました。

高盛の始まりは北野のすいき祭と同じく、収穫の感謝行事であろうと思われます。現在は10月6日から7日にかけて、夜を徹して氏子の男子だけで当家に集まり、調進するのです。



なます 大根膾の高盛——大根の輪切りを台に竹串を立て、これに縦に長く織切りしたなますを巻きつながら小芋の高盛と同大の円錐に造る。途中でしいらの切り身を挟んで四方へ垂らすとか、三本並んだ生薑を飾るなど、何かと飾りつけがあつてむづかしい。

刻み鰯の高盛——するめの細く削ったのを酒でしめしながら大根と同様に盛る。これには大きい袖の輪切りを紋のように飾る。太い諸を薄く輪切りにし、雪輪菊や各自の鉢の紋を彫って



御飯の高盛——炊いた御飯を茶巾絞りのようにして三重ねのお鏡餅の形につくる（一の鉢）、御飯をもつそう（桶型）で固めたもの（二・三の鉢）。これを太い縄で巻いておく。

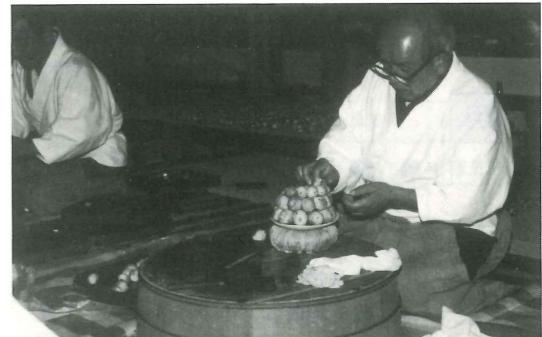
小芋の高盛り——小芋の芽を残して白く掃除し、大きいものから順に11個ずつ14.5段に石垣のように積み、大きいかわらけに盛る。崩れぬように炒った味噌で内側を固める。上端に円錐形に削った茄子をのせて全体を40種ほどの精巧な円錐に仕上げる。

梅酢で染めて揚枝で飾りつける。

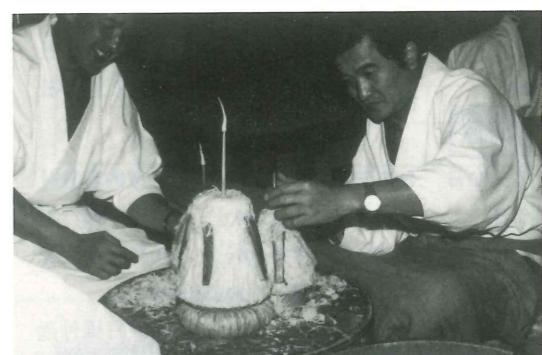
中心となるのは右の四つの高盛で、他にしいら一匹、白豆腐、飛魚、濁酒（曲物を入れる）、白米五升など用意されます。

七日朝は女子の出番です。黒の紋付姿ですがこれにはんのき染の渋い赤の三幅前垂が加わって、白川女独特の儀式用盛装。原則的には娘達の奉仕です。一番に御飯の高盛、二番は残る三つの高盛をのせた三宝の前後に豆腐や濁酒、しいら等を長方形の浅い木箱に納めたのを頭にします。三人目は盤に白米を入れたのを片手で支え、片手は突き袖という姿。

午前7時半ころ、当家から石段下の斎場まで頭にのせて運ぶのが見ものですが、9時頃には儀式が終り、直ちに直会となってこの手間のかかった御馳走はもうみられません。是非多くの人々に見て頂きたい珍しい行事だと思っています。（郷土史家・京都市左京区北白川在住）



小芋の高盛り。小芋を積みあげ味噌で内側を固めていく。



高盛は、氏子の男子だけで夜を徹してつくられる。



10月7日早朝北白川天神宮へ奉納される高盛。

京の主な年中行事 (10月～12月)

10月

- 1～5日 瑞饋祭 北野天満宮
(4日午後10時30分 瑞饋神輿の巡行)
- 7日 北白川高盛御供(午前7時30分) 北白川天神宮
- 10日 牛祭(午後7時) 広隆寺
- 10日 八瀬赦免地踊(午後8時) 八瀬秋元神社
- 13日 二十五菩薩お練供養法会(午後1時) 泉涌寺即成院
- 22日 時代祭(正午出発)
- 22日 鞍馬の火祭(午後6時) 由岐神社
- 23日 岩倉火祭(午前2時) 岩倉石座神社

11月

- 1～30日 七五三詣り 市内各神社
- 3日 曲水の宴(午後2時) 城南宮
- 8日 火焚祭(午後1時) 伏見稻荷大社
- 10日 嵐山もみじ祭(午前10時30分～) 嵐山渡月橋付近
- 23日 筆供養(午後2時) 東福寺正覚庵

12月

- 7・8日 大根だきと成道会法要(午前10時～) 千本釈迦堂
- 8日 針供養(午後1時) 法輪寺
- 9・10日 鳴滌の大根だき(午前9時～) 了徳寺



八瀬赦免地踊



二十五菩薩お練り供養



筆供養



おかげ詣り

- 14日 義士まつり(午前10時毘沙門堂出発) 山科
21日 終い弘法 東寺
25日 終い天神 北野天満宮
31日 おかげ詣り 八坂神社
※都合により行事・日程が変更される場合がありますのでご了承下さい。

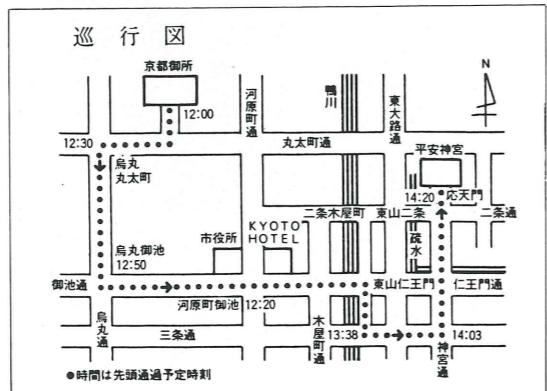
時代祭 10月22日(火)

京都の秋を彩る時代祭は、京都が都であった延暦から明治にいたる各時代の代表的文物風俗を、有名人物や行事によって行列を組み、1100年の歴史、風俗絵巻を都大路にくりひろげる。



行列順序

- ①維新勤王隊列
- ②幕末志士列
- ③徳川城使上洛列
- ④江戸時代婦人列
- ⑤豊公参朝列
- ⑥織田公上洛列
- ⑦楠公上洛列
- ⑧中世婦人列
- ⑨城南やぶさめ列
- ⑩藤原公卿参朝列
- ⑪平安時代婦人列
- ⑫延暦武官行進列
- ⑬延暦文官参朝列
- ⑭神饋講社列
- ⑮前列
- ⑯神幸列
- ⑰白川女献花列
- ⑱弓箭組列



京都御所秋の一般公開

日 時：10月17日(木)～10月21日(月)
午前9時～午後3時
※この期間中は、一切の手続きなしで参観できます。

女人舞楽の夕

日 時：10月12日(土)午後6時
場 所：シルクホール
入場料：前売券 1,000円 当日券 1,500円

主 催：京都舞楽会(お問い合わせ(075)781-6391)

未公開文化財特別拝観

期 間：11月1日(金)～11月10日(日)
午前9時～午後4時
拝観料：1箇所 600円
主 催：京都古文化保存協会(お問い合わせ(075)561-1795)

保護財団の活動

第16回郷土芸能の夕 ご案内

京都に古くから継承されている伝統行事、芸能を紹介する「郷土芸能の夕」。今年は、特に子どもたちが中心となって活躍する芸能に、京のわらべうたをmajieて開催いたします。京都の民俗芸能を受け継ぐ子どもたちが、おりなす楽しい舞台を皆様も是非ともご覧下さい。

◆とき 10月26日(土)午後6時30分開演

◆ところ 京都会館第2ホール

◆料金

前売券 900円(市内各プレイガイドで発売)

当日券 1,200円

団体券(15人以上) 800円

◆主催 京都市

財団法人京都市文化観光資源保護財団

公開寺院	主な文化財	備考
大徳寺	本坊 方丈・庭園・襖絵	3日・5日休み
	興臨院 本堂・茶室・庭園	5日休み
	玉林院 茶室・襖絵	3日・7日休み
	聚光院 方丈襖絵・茶室・庭園	
	養徳院 茶室・庭園	
相国寺	林丘寺 本堂・開山堂・望嵐亭 時間午前10時～午後4時まで	1日～6日休み 時間午前10時～午後4時まで
	法然院 本堂・殿舎・襖絵	10日休み
	妙法院 庫裏・大書院・宝物館 庭園	
	本坊 庭園・襖絵	2日午後 3日・4日休み
	法堂開山堂 蟠竜図・庭園	
慈照院	承天閣美術館 寺宝特別展	
	光明寺 絹本着色羅漢像・庭園	
	慈照院 客殿・書院・茶室・庭園	



7月7日白峯神宮でおこなわれる小町をどり。今回、舞台から皆様にご紹介いたします。

後援 NHK京都放送局・京都新聞社・KB

S京都

構成・演出 権藤芳一(京都観世会事務局長)

司会 露乃五郎(落語家)

出演 嵐峨野六斎念仏・雅樂・上賀茂さんやれ・八瀬赦免地踊・小町をどり・千本えんま堂大念仏狂言・京のわらべうた

※本催の入場料を当財団会員の方、ご本人に限り優遇させていただきます。については、郷土芸能の夕会員割引券を切りとり、入場券売場へご提出下さい。



昭和61年版

文化財カレンダーのお知らせ テーマ「京の伝統行事芸能」

昭和61年版文化財カレンダーを京都の伝統行事芸能をとりあげ作成いたしました。会員の皆様方でカレンダー配布ご希望の方は、下記の要領によりお申し込み下さい。

■掲載内容 鋸始め（番匠儀式）・やすらい花・賀茂競馬・松上げ・八瀬赦免地踊・嵯峨大念仏狂言

■申込方法 文化財カレンダー申込み及び住所、氏名（法人の場合は、法人名と代表者名）を記入のうえ、切手350円分（郵送料）を同封し、封書によりお申し込み下さい。

■申込期間 12月1日まで

■申込先 〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町 京都会館内
京都市文化観光資源保護財団宛

○申し込み資格は、当財団会員に限ります。

○申し込み部数は、1人につき1部とします。

○なお、申し込み多数の場合は、制限することがありますのでご了承下さい。

○カレンダーの発送は、12月中旬の予定です。

第43回 文化財特別参観のご案内

“八木家住宅”と

“旧神先家住宅”

今回は、京都市指定文化財である壬生の旧家、八木家住宅と旧神先家住宅を訪ね、江戸時代の京都の町家建築を見学いたします。

■参観日時 昭和60年12月7日（土）

午後2時（参観時間 約2時間）

■対象者 財団募金協力者（会員）とその家族

■申込方法 住所・氏名・年令を記入し、返信用切手60円分を同封の上、封書によりお申し込み下さい。

■申込先 〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町 京都会館内
京都市文化観光資源保護財団宛

■参加費不用

※お問い合わせは、財団事務局まで。なお、参加ご希望が多い場合は、制限することがあります。

編 集 後 記



■ 今回は、特に京のわらべうたでご活躍の高橋美智子先生、民俗芸能の調査研究をされている山路興造先生に、ご寄稿をいただきました。両先生には、当財団「郷土芸能の夕」の舞台構成にも多年にわたりご協力いただいております。

■ 事務局では、会員のみなさんからのご寄稿をお待ちしています。京都の文化財や年中行事について、また当財団に対すること、会報の編集など、どのようなことでも結構です。ご意見やご感想などお気軽にどうぞお寄せ下さい。当会報で紹介していきたいと思います。

■ 会員の方の代表者、住所などの変更がありましたら事務局までご一報下さい。

—差別をなくして明るい社会をつくろう—